

## (4. 共同研究班活動報告)

## 4-5. 社会的支配志向性と偏見との関連

——学際研究の視点も含めて——

中越 みずき・水野 景子

## 研究会開催概要

日時 2019年9月04日(水) 14:00~17:30

場所 関西学院大学 大阪梅田キャンパス アプロースタワー 14階 1406号室

## 研究会発足の経緯

近年、社会心理研究において、社会心理学というひとつの枠組みにとらわれず、学問横断的な研究を試みる趨勢がある。学際研究の必要性が叫ばれる昨今では、各々の研究分野の研究者が協働していくことが求められている。この点においてなかでも、社会心理学者である三船恒裕氏は、経済学や政治学といった学問分野における知見を採り上げることで、心理学領域に限定されない先鋭的な研究を行っている三船氏の発表は、心理学者や心理学を学ぶ院生に対して、各々の研究に視座を与えるものとなるであろう。三船氏の講演は、社会学研究科の院生のみならず、本学の教員、さらには他大学の参加者にとっても有意義であると考えられる。以上の理由から、三船氏を招聘した講演研究会を行った。社会心理学研究会班では、高知工科大学経済・マネジメント学群の三船恒裕氏を招来し、三船氏が近年取り組んでいる偏見研究、さらには学際研究の意義に関する報告を依頼した。研究会を行うにあたって、関西学院大学大学院の院生のみならず、他大学の研究者および院生にも広く宣伝を行うことを目的とし、専用ポスターおよび告知文を作成、先端社会研究所のホームページ上で公開した。また、日本社会心理学会にメールニュース配信を依頼し、広報を行った。

研究会を開催するにあたって、問題意識は以下の点にあった。第1に、社会心理学領域において、個人差要因に着目した偏見研究はいかなる変遷を遂げているのかという点である。第2に、学際研究を行うにあたり、各々の専門領域を有する研究者はいかに協働が可能であるのかという点である。

## 当日の流れ

研究会は2019年9月4日、関西学院大学大阪梅田キャンパスの1406室で行われた。研究会には、本学の院生や教員に留まらず、他大学・他領域の院生や研究者が参加した。報告に際して、適宜質疑応答が行われた。以下、三船氏の報告を概観する。

「偏見」の定義 偏見はネガティブなステレオタイプとして捉えることが可能である。具体的には、「ステレオタイプ」はある集団の特徴に対する信念として定義され、その内容が肯定的か否定的かを問わない概念であるのに対し、「偏見」はある集団に対する否定的な評価や感

情、行為意図を指す。

パーソナリティ要因に着目した偏見研究の歴史は古く、1950年代には個人特性に偏見の原因を求める権威主義的パーソナリティ研究の存在が認められている。その後も、個人差要因であるパーソナリティ特性によってマクロなレベルの集団間葛藤を説明しようとする試みがなされてきた。しかしながら、これらの研究があまりにも外的要因を無視しているといった批判が集まり、以後は社会的アイデンティティ理論などの状況要因に着目した理論が発展していった。その他にも、世界観や社会構造の要因を重視する理論として存在脅威管理理論や社会的支配理論が提唱され、これらの諸理論は今でもなお社会心理学領域において存在感を放っている。

近年では、集団間葛藤や差別に関して、集団や社会レベルの状況要因の重要性を認めつつも、パーソナリティに代表される個人差要因や、あるいは状況要因と個人差要因の交互作用をも考慮する必要があるとの立場が強くなってきている。本研究会では、偏見に関連する個人差要因としての公正世界信念と社会的支配志向性 (Social Dominance Orientation: 以下 SDO) との関連、さらにはゲームを用いた実験室実験による検討が報告された。

**公正世界信念と SDO** 公正世界信念とは「世界は公平・公正にできており、人は得るべきものを得ている」と信じる心的傾向をいう。基本的に、公正世界信念の強さは、低地位層や困窮層への否定的態度や偏見と関連する。ただし、公正世界信念と人種・民族的偏見への関係は明確ではなく、少なくとも古典的偏見との関連はみられないことを報告した研究が多々存在する。ただし、より現代的な偏見 (e.g. 「被差別者は十分に優遇措置を受けており、彼らが苦境に立たされているのは彼ら自身に原因がある」) と正相関することを示した研究もあり、古典的偏見と現代的偏見とでは公正世界信念との関連が異なる可能性が考えられる。次に公正世界信念と SDO の関連に着目すると、公正世界信念と SDO の関係も決して明確ではない。両者が正相関するという研究もあれば、大サンプルでは無相関であったという報告もあり、結果は混在している。近年では、従来用いられてきた公正世界信念尺度の信頼性が低いという問題に対応するため、いくつかの新しい尺度が作成されている。また、公正世界信念を内在的公正世界信念と究極的公正世界信念に区別したうえで、SDO との関連に関する検討もなされてきている。

**実験室実験による検討** また、三船氏は実験室でのゲームを用いた研究を複数紹介した。ゲームを用いた研究の利点としては、実験者によって統制された状況下で、ある行動 (Behavior) を起こすメカニズムについて検討できる点にある。集団間の囚人のジレンマゲームにおける協力行動 (囚人のジレンマゲームの詳細については本誌別所のコラムを参照されたい) に SDO が与える影響についての研究や、外集団または内集団への攻撃行動を測定する先制攻撃ゲーム (Preemptive Strike Game; Simunovic, Mifune, & Yamagishi, 2013) を用いた研究で、人の集団内または集団間での協力行動や、外集団に対して攻撃行動をするメカニズムが検討されている。三船氏は実験ゲームについて、心理学と経済学の知見を合わせて新たな知見を生み出す、自身の「武器」になりうると述べた。このように、他分野で用いられるパラダイムを用い

ることで自身の分野にとどまらない学際研究を行うことができる。

**学際研究を行うにあたって留意すべき点** 学際研究について議論するにあたり、三船氏がまず強調したのは、他分野・他領域の共同研究者に対する敬意の必要性である。異なる分野の研究者が連携するためには、共同研究者の領域の前提あるいはディシプリンに対する一定の理解が必要である。また、研究のインパクトを高める為には、特定分野の研究者にとってマストリードとなるような研究にすることが重要であるとの言及もなされた。

### 総括

日本の社会心理学においても、偏見や差別研究そのものは活発な動きをみせている。本研究会で報告されたような個人差要因を検討することで偏見の説明を試みる研究から、実験室状況によって集団間葛藤のダイナミクス過程を検討するものまで、そのアプローチは極めて多様である。今後は、種々のアプローチからもたらされた知見を、いかに照らし合わせていくのかという観点も必要であろう。

学際研究に関して言えば、近年、社会心理研究において、社会心理学というひとつの枠組みにとらわれず、学問横断的な研究を試みる趨勢がある。学際研究の必要性が叫ばれる昨今では、各々の研究分野の研究者の協働が強く求められている。この点において、心理学領域に限定されない先鋭的な研究を行っている三船氏の報告は、社会学研究科の院生のみならず、本学の教員、さらには他大学の参加者にとっても、学際研究を考えるにあたって意義深いものであった。

以上、三船氏の報告を概観した。本研究会で報告された内容は、研究会発足に際して掲げた2点の問題意識についても、十分に応答しうるものであった。報告中には多くの研究者や院生から質疑が寄せられ、予定時間を超過しつつも、最後には活発な議論が行われるなか研究会は締めくくられた。

